

Title	編集後記
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.115 (2006. 2) ,p.337- 337
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000115-0339

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この論文集は三田哲学会刊行『哲学』の特集号として企画され、本塾大学院社会学研究科教育学専攻に所属する大学院生と若手の研究者たちのアクチュアルな論攷によって構成されたものです。その意味でいずれの論攷もいまだ研究途上にあるとはいえ、結果としてはかえって斬新で創発的な視点や指摘の豊かさをもった生産的な論集となりました。

ところで「教育」はすでに、プラトンの対話編に示されるように、古くから哲学者や思想家が取り組むべき最後の本来的な課題とされてきました。そして、教育に関する思考は人間にかかわる多様な科学知の総合として成り立つものだ、と認識されてきたこともまた事実です。したがって教育学研究は当然のことながら諸科学の知識の総合の上に成立するものなのですが、それが教育学研究であると称されるための根拠こそが「教育」という視座ということになります。慶應義塾の教育学の学問的伝統、学問的エートスの中心はまさにこうした「視座」へのこだわりと、そのメタ思考的な姿勢の共有です。

今日あらゆる学問領域 (disciplin) においてその自律性を担保するはずの学自体の自己理解に対して疑義が拡大し、領域区分を可能ならしめた境界設定の根拠が融解の危機に瀕していると言われます。それは教育学の自己理解にとどまらず、さらには総じて「人間」の概念 (自己理解) 自体へのさまざまな疑義となっ

て顕現しています。こうして教育研究はその表面的な拡大と科学化の進行の裏面で、学問としての存在理由への問いにさらされているわけです。一方では脳科学や遺伝子工学など生命科学の急速かつ歴大な知見の拡大と深化が見られ、他方で文化問題としての相対主義や懐疑主義との対決とその克服への試行が切実に希求されています。すなわち新しい生命観や身体論に基づき、さらにはさまざまな文化批判や理性批判を組み込んだ新たなる総合的な「人間学」の提起と、さらにはそれを教育の視座より理論化する斬新な教育学研究が今こそ待ち望まれているのです。

こうした知的状況下に「教育問題のもつ本質的なパラドクス」を十分に自覚しながらも、技術主義的な知性や原理主義的思考のもつ自閉した思考回路に陥ることなく、かといってシニシカルな批判に終始することもなく、批判 (解体) と創造 (再構築) との間の緊張をはらんだ生産的関係を研究過程に取り込むためには、構想力を活性化させた多元的な対話の構築と、それを介した間主観的な人間理解、教育理解の協同的形成への覚悟とルールそしてモラルと勇気をもって「問題としての教育を問い続けていく」ことが要請されますし、このことは教育にとってのみならず「教育学」の形成にとっても妥当する原理であろうとの思いを新たにしています。

(舟山俊明)